

山形県・農漁商家にみる刺し前だれについて

山形県立米沢女短大 徳永幾久

目的 棉花の育たない寒冷地の東北では 布の命を長らえることは 生業に匹敵する技術であつた。度重なる凶作と 過酷な供出にあえぐ農民は 米と交換で古手を買ひ補強の刺しを入れ着用した。特に身の前を飾る前だれの刺しは 補強化から次第に装飾化に進み 布節約の技術は 妻を評価する対象にもなつたのである。又一方 紅花を扱う商家の内儀は 紅花の市日や 初市には 家の富貴と福寿長生を願う刺し文の前だれをつけ、その誇りを表現した。また呪符の赤い三角布や縁取りのある腹部を保護するものもあり、作業時に汚れを防ぐ前だれは 刺しの必要から 刺す人の技術と意味づけにより特色あるものが出てきた。以上により本報は これら意図的刺しの模様構成について報告する。

方法 県内各地域から収集された各種前だれについて比較し考察した。

結果 1) 農漁家の初期のものは 粟 くぐなどを使い 腰みの風のもの、胸当付のもの等工面されたが、古手物の入手により、1〜3中の胸当付前だれが出来、縦横を基本とした刺し文が多いが 身近な産物をモチーフにしたものもあり その技術と造形は工芸品として評価されるものである。2) 紅花商家のものはノ中物で 吉祥散らし文、ソロバン 花文の並列文、と上方の糊染の寄せ切れに刺し文を入れたもの 3) 呪符の赤布をつけた産婦用等がある。以上前だれには 主婦産の身近なものや願いが刺されているのが特色で、布不足の中で主婦の作る装飾は 守る 清める意味から始まり、次第に様式化され 型式化されてゆくのがみられた。主婦が祈り求めるものを縫い止め、それを身につける事による安心感 幸福感を得る被物として前だれを再考したのである。